

人類は、海から発生して川を上り、森に入り、人が生れたと伝えられるように、人と水との係り合いは不可欠なものであります。戦後は洪水や氾濫を恐れ、行政は安全を優先し、人と川とをコンクリートの壁によって遠ざけて参りました。近年西欧を始めとして「運河ルネッサンス運動」が始まりました。わが国でも、福岡、大坂、名古屋、東京等主要都市にもこの運動が始まり、川や運河の自然景観を回復させて、安らぎや憩いを水辺に求めるようになりました。韓国ソウルの中心部を流れていた清溪川(チョンゲイション)は、30年前に汚いからと覆蓋されてきましたが、5年前に復元されて今では市民のスポーツ、散策、憩いの川辺として大好評のにぎわいを見せており、川のルネッサンスの象徴的存在であります。

小糸川はかつて「周准川、秋元川」とも呼ばれ、清澄山系として6つの滝、2つの沢、6本の支流からなった全長56キロメートルの長さを持っており、かつては上流から農産物、木材、薪炭等を運んで栄えた川でありました。川沿いにはいくつかの宿場町もあり、栄えたと伝えられております。関東大震災で川底が隆起したこと、鉄道、自動車の発達で小糸川水運の歴史も終わった様であります。

君津市は人口が減少しつつあります。

家族も市も人が減る事は活力を失います。そこで一つの提案ですが、人が住みたい町を川沿いに作ってみたいと思いました。

本年度、日本商工会議所グランドデザイン賞に輝いたのは、宮崎県の「油津堀川運河」の復元でありました。歴史遺産と景観資産を保存すると共に、新たなまち作りに生かしたからであります。川筋の水際空間、川沿いの空き地を利用した街路、ジョギング、散策コース、広場と駐車場であります。

高崎市も隣接の利根川沿いに大駐車場を作り、駐車から市内へのまち作りがあります。印旛沼も沼沿いジョギング、サイクリングコースを併設して冬でも多くの人を訪れております。昨秋訪れた信濃川口には、数100隻のレジャーボート、釣り船が係留されてこの係留料金は年一隻約9万円~19万円位と聞きました。

小糸川口は今ほとんど未利用ですので、これも大きな観光資源であります。

幸い、君津市には1%支援事業があります。この事業を活用され、会員の方々はそれぞれの地域のリーダーとなり、美しい川沿いの景観を取り戻す役目をしていただき、美しい水辺、豊かな自然を求めて移り住む人達への受け皿を作って下さる様願っております。

これからしばらくの間不況が続くかもしれませんが、景気回復を手を拱いて待つ訳には参りません。今ある君津市の資産を活用、育てて行く知恵と行動が必要であります。私達は家族や社員を養い、育てる役目があるようにこの「まち」もまた私達の手で養い育て行く役目があります。

今世界が協調して首脳たちは政治生命をかけ、国家財政を傾けて努力しています。マスコミが伝える程の不安感を持つ事は今後の生き方にプラスにはならないと思います。

闇が深いほど夜明けが近いと言いますから・・・